

京都を代表する川といえば鴨川ですが、同様に重要な存在が京都より少し南の**宇治川**です。「境界」を想起させる川として、出来事も多い。今回はこの宇治川をめぐるお話をいたします。

**古**墳時代一帯から儒教と漢字が伝来した5世紀頃ですが、応神天皇が亡くなって異母兄弟3名が後継争いをしました。結果は長兄が川で落命、次兄が後継者（仁徳天皇）となり、末弟は位を兄に譲った後に横死（自殺？）となります。末弟の名は**菟道稚郎子**、「宇治天皇」の別称があるくらいの地場豪族で、聡明で有能な方だったようです。現在は宇治神社に祀られています。説話の七夕祭りでは、県神社の木花開耶姫（コハナサケヒメ）と年一度の逢瀬を交わされますが、今も毎年6月に御輿の「ぶん回し」で有名な暗闇の奇祭、**県祭り**に継承されています。

**宇**治の地は地理的に四方への結節点です。宇治から山科を通り近江へ、あるいは宇治川を遡り近江へ、また木津川を南下して大和へ、さらに淀川を経由して難波へと、まさに要衝の地といえます。宇治川も水運による輸送は勿論、戦略上も最重要の存在となっていました。

**宇治橋断碑**という碑柱によれば、**僧・道登**が大化2(646)年に宇治川に橋を架けたと記され、また『続日本紀』では**僧・道昭(照)**が文武4(700)年に架橋したと記してあります。いずれにせよ、当時の僧侶は国営の寺の仏教学者（国家公務員）であり、また社会事業家としての側面も持っていました。ちなみに、少し後の僧・行基などは畿内に49もの架橋を行っていますよ。莫大な資財、国家的な大土木工事ですから、今なら間違いなく「プロジェクトX」の対象ですね。

**壬**申の乱（672年）の少し前に、大海人皇子（後の天武天皇）が近江朝から必死の面持ちで逃げて、宇治周辺の支援者の助けでこの川を渡り、吉野に落ち延びました。後年に乱の勝利者となりましたが、この川は地域を分かっただけではなくて、まさに生死の境界線でした。

**橋** しいがもと あげまき さわらび やどりぎ あずまや かげろう ゆめのうきばし  
 姫・椎本・総角・早蕨・宿木・東屋・浮舟・蜻蛉・手習・夢浮橋

これはかの**紫式部**の『源氏物語』54帖の最終10帖の表題ですが、舞台は宇治とされており「**宇治十帖**」と呼ばれます。式部は夫・藤原宣孝と3年で死別、娘・賢子を抱えての寡婦生活の中で創作を開始（約1,000年前）したそうです。そういえば、好敵手の清少納言が『枕草子』を記したのも夫・橋則光と離別した後でした。式部親子の歌は百人一首にも揃って登場します。

めぐりあひて 見しやそれとも わかぬ間に 雲がくれにし 夜半の月かな（紫式部）

有馬山 猪名の笹原 風吹けば いでそよ人を 忘れやはする（賢子；大式三位）

さて、宇治十帖での最大のヒロインは浮舟という女性ですね。薫の君と匂の宮との二人の男性に愛されて、居所を無くした揚句に宇治川へ入水します。幸いも比叡山の僧都に助けられ尼となりますが、山と川を素材に用いて、「**あの世とこの世**」を書き表わしているように思われます。

秋の紅葉、あるいは**アジサイ寺**としても有名な**三室戸寺**には浮舟の記念歌碑があります。

**当**時の宇治は都を離れて棲む隠遁者（喜撰法師その他）が多く、また風光明媚な土地ゆえ

貴族層の**別業**地、即ち別荘が多く構えられました。**平等院**も元はといえば源融（嵯峨天皇の皇子）の別業・宇治院であって、後に藤原道長の別業となり、子の頼道の代に浄土世界を具現した平等院（阿弥陀さんは**仏師・定朝**の作）となります。まことに宗教的な色彩の濃い土地となります。あの道長ですら臨終時には9体の弥陀にすぎりました。後世では木幡地区の**浄妙寺**が藤原氏一門の氏寺（墓所）となり、**宇治37陵**と呼ばれるように聖地となってきます。余談ながら、この地の選定には、あの陰陽師・安倍晴明と賀茂光秀が命じられていますね。

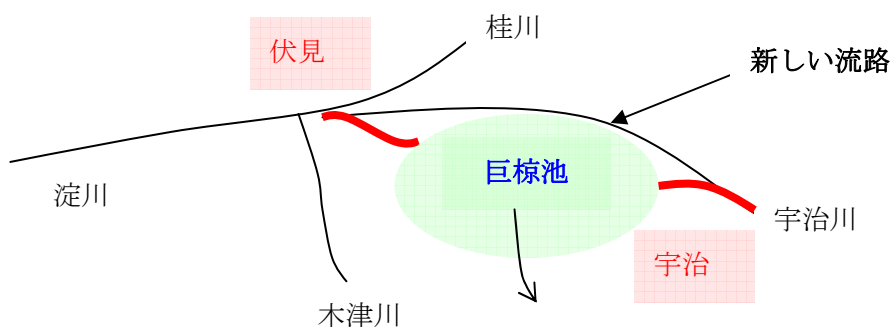
この世をば わが世とぞ思ふ 望月の かけたることも なと思へば（藤原道長）

わが庵は 都のたつみ（かぞすむ 世をうち山と 入はいふなり）（喜撰法師）

**時**は移り、平家を追う源義経が宇治川に到着します。「**宇治川先陣争い**」（1184年）として名高いものですが、主人公は家来の佐々木四郎高綱と梶原源太影季の二人です。急流を怖れて皆が尻込みする中、両名が馬もろとも川に飛び込み、向こう岸まで先着を競うわけですね。結果は高綱の勝ちですが、勢いついた源氏はますます対岸の平家を追い散らすという次第です。

地理的な重要性が危うくなったのは、豊臣秀吉による宇治川の付替えでした。つまり流路を以前とは変えたんですね。伏見城建設に伴い、秀吉は伏見を物資往来の集積地にしようと計画します。従来の宇治川は遊水地である巨椋池おぐらいけに一旦流れ込み、溢れ出るとさらに淀川へ流れ出る流路（太い赤線）でした。それを池と切り離し、北側を迂回させ、伏見で合流させるようにしました。池は船便が通り、それゆえ宇治は物資集積地の港でもあったのですが、宇治川の流れ込まない池は次第に湿地化し、宇治の港も衰退しました。確かに当時は貴族社会から武士の社会へと変貌してしまっていたので、まことに象徴的・運命的なものではありません。

巨椋の入江 響むなり 射目人の 伏見が田居に 雁渡るらし



巨椋池も昭和の初期に干拓され、最初は農地、その後は住宅用地となり、姿を消しました。



茶業による復活——宇治の命運は再び地理的特徴により復活します。宇治川の上流域は谷間で昼夜の寒暖差が大きく、霧の出やすい冷涼な気候で、酸性土壌で水捌けも良い。茶が日本に伝わったのは弘仁6(815)年、嵯峨天皇の時代に遣唐僧・永忠が献上したことに始まります。平安貴族の没落とともに一旦衰微しますが、鎌倉時代に僧・栄西みょうえ(臨済宗の祖)が禅とともに抹茶をもたらし、武士階級に広まります。弟子の明恵上人みょうえ(高山寺の中興)は栄西から種をもらい、梅尾とがのおで栽培普及させます。当時は病を癒す効能が信じられて、仏の教えによる民衆救済を説くためにも、好都合であったわけです。梅尾茶は最高級品として名声を博しましたが、後年宇治地域に伝わり、面積も広く気候風土も好適地であったことから一大産地にのし上りました。千利休や門人の活躍も有名ですが、江戸時代の「御茶壺道中」もまた出色です。江戸將軍家への献上品として、大きな壺(山を越えた隣国の信楽産)に入れたお茶を大名行列のように運びます。400~500名の大仰さゆえ往来の人馬は道を譲らねばならなかったそうです。

夏目漱石の『草枕』の中で、寺の老僧が青年に茶をすすめる場面が出てきます。小さな急須から搾り切るように湯飲み茶碗に注ぎます。現在では健康茶ブームで、ペットボトルからガブガブと飲みますが、一昔前の茶は最後の数滴を嗜んだようです。寿司屋の上がりも喫茶のイメージとは随分と違うようですが、茶そのものが安価になったためでしょうか。戦前では、600g(一斤)が、大工さんの手間賃3日分に相当したとも言われております。ところで、宇治茶の平成11年度の国内生産量のシェアは3.4%で、静岡44.2%、鹿児島20.8%、三重8.3%、宮崎3.5%に次いで第5位と、思いの外小さく、第6位の奈良も3.3%と僅差です。発祥地というブランド力もさることながら、茶師ちやし(茶園業者; 元々は土豪であり、神官や僧侶が多い。森家、上林家が著名。)が守り抜いた品質も賞賛されます。茶は「狐草」との異称があるくらい、湯の量や温度、精製、ブレンド具合によって味わいが千変万化し、騙されてしまいます。透き通った山吹色、「甘さの伴った渋み」、これが極意です。苦味はいけません。苦味をもし感じたら、湯温を少し低めにすると良いでしょう。甘味が出るはずで



**吉**川英治の『宮本武蔵』、宇治橋たもとの**通円茶屋**が登場します。恋人のおつうさんが大和への道中で立寄った店ですが、この家は代々「**橋守**」（橋の見張り番）をしていました。昔の橋は木造ですから、とりわけ“火”に弱いのです。夜半の往来は提灯・行灯・松明などがつきものですが、火種がポタリと落ちたまま気付かず、結局は火災となることは多いのです。また、川の洪水被害も甚大です。17世紀以降だと、記録に残る大洪水は22回もあります。それ以外には牛馬や犬などの糞尿による腐食被害ですね。何せ罰する相手が特定できないものですから、橋守役自身が役所から大目玉を食らってしまうわけです。橋守は確かに地元の名士しかなれませんし、それなりの特典や商売上の優遇策も受けてはいましたが、義務の方が大変です。それこそ寝ずの番をしたと思いますよ。橋を守ったエピソードも数多く残っています。

**柳****橋水車**——桃山時代を代表する意匠で、宇治の代名詞です。まさに宇治川そのものの情景ですよね。これまで何首か紹介しましたが、歌の世界でもキーワードは決まっています。宇治川、網代、鶺鴒、柴舟、水車といったところです。網代というのは漁法の一種なのですが、流れの中に杭を立てて、すだれのようなものを網の代用に使い、流れと共に魚を取り込む方法です。宇治の地は、もう川そのものです。百人一首の代表歌と日記一遍を紹介しましょう。

朝ぼらけ 宇治の川霧 たえだえに あらはれわたる 瀬々の網代木 (権中納言定頼)

川にむかへて すだれまきあげて見れば 網代どもをし渡したり ゆきかふふねども  
あまた見ざりしことなれば すべてあはれにおかし  
こくらくなりぬれば 鶺鴒どもかがり火さしともしつつ ひとかはさしいきたり  
おかしく見ゆることかぎりなし (『蜻蛉日記』藤原道綱母)

嘆きつつ ひとり寝る夜の 明くる間は いかにかえき ものとかは知る (右大将道綱母)

蜻蛉日記の作者は藤原倫寧の娘で、**受領**（地方赴任の官吏、国司）の藤原兼家の妻となり、道綱を産む。今日風に言えば、受領は私腹を肥やす悪徳官僚の代名詞になり、地方自治の乱れは中央政府の根幹（土地管理、徴税）を揺るがした要因でした。勝手気ままな夫は家を空けることも多く、子供の成長・出世のみが救いという、嘆きつつ暮らした中から生まれた歌であり、日記でした。平安朝は優雅なイメージがありますが、ままならぬことも多かったようです。

瀬戸内寂聴の小説『花に問え』、宇治の鶺鴒がヒロイン・美緒の回想シーンに登場しますね。源氏物語の浮舟もオーバーラップする、妖しくも官能的な場面が展開されます。瀬戸内さんの真骨頂発揮といったところでしょうか。

**萬****福寺**。宇治に関してはここも外せません。中国福建省から渡来した高僧・**隠元禪師**が創建（寛文元・1661年）した、中国明朝様式の建造です。**臨濟宗**（**栄西禪師**；建仁寺創建）

や**曹洞宗**（**道元禪師**；永平寺創建）と並ぶ3大禪宗、**黄檗宗**の本山です。隠元さんは中国風の普茶料理や煎茶の製法、そして**インゲン豆**を日本に伝えました。同宗では、お経をはじめ儀式作法も中国様式であるのが大きな特徴で、在日の華僑ら中国系の信者が多数おられます。

宇治はかような具合で、まことに彩り豊かな、魅力ある土地です。10月～11月は紅葉を愛でながら散策し、源氏物語ミュージアムその他、宇治十帖の世界を楽しむもよし、茶団子と宇治茶で一服するもよし、できれば歌の一首でもどうでしょうか。時節柄、冷たい雨となつてけぶるかもしれませんが、これもまた一興。一つ傘の内というのも、よろしいかと思えます。

最後に、源氏物語の作者・紫式部の関連で一つご紹介しておきます。場所は京都市内になり、足を伸ばしていただく必要がありますが、堀川通り・北大路の交差点近くにお墓があります。正確に言いますと、交差点の南西、島津製作所の工場の南側に、小野篁の墓と並んであります。